

## 明代白話作品に見られる"在Y" : 《三宝太?西洋記》を中心に

著者	伊原 大策
著者別名	IHARA Daisaku
雑誌名	中国文化 : 研究と教育 : 漢文学会会報
巻	49
ページ	L14-L23
発行年	1991-06-29
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00150005">http://doi.org/10.15068/00150005</a>

# 明代白話作品に見られる“在V”

——《三宝太监西洋记》を中心に——

伊原 大策

## 1

“在V”の句型は、語法史的には新しい句型であり、その由来は南方方言に基づくこと、一般には考えられている<sup>1)</sup>。事実、“在V”の用例が目立ち始めるのは、五・四期以降の南方系作品においてであり、標準的な語法として北方にも普及するのは、それよりもやや遅れる。五・四期以前の作品からは、“在V”のまとまった用例を見出すことは難しく、明清の白話作品中では、形態の点で類似した“正在V”及び“在那里V”を認めることができるばかりである<sup>2)</sup>。これら二つの句型のうち、形態的に“在V”により近い姿を呈している“正在V”にしても、多くの作品において常用されるのは、明代の万曆後期以降であり、それ以前の作品から“正在V”の用例を検出することは困難である<sup>3)</sup>。さらに形態と機能の両面において“在V”と“正在V”との中間に位置するかに見える“还在V”（または“都在V”，“也在V”，“又在V”など）についても、その成立は清代中期以前に遡ることはできないとされる<sup>4)</sup>。

このように、現代語では高い頻度で用いられる“在”を伴う語法は、語法史の中では比較的新しいものと考えられそうではある。しかしながら、これらの句型は、実は断片的にはあるが、古い時代の作品からも複数の例を見出すことができるのであり、テキストの信憑性に対する疑問を割引いて考えても、“正在V”，“还在V”及び“在V”の句型を成立させる語法の流れが、そこに潜んでいる可能性を否定できない。突如として現われてはたちまち消えることを繰り返したかに見えるこれらの句型は、文学言語として白話作品に定着する以前は、どのような姿をしていたのであろうか。

小論は、これまで等閑視されていた“(正)在V”の明末頃までのわずかな例を顧みると共に、合わせて、明代中期の特定の作品に“(正)在V”が大量に使われている事実を指摘し、いささかの検討を加えることを試みる。もとより、白話作品は（散佚したものを含めれば）無限であり、管見に及ぶものはわずかに過ぎない。小論で取り上げることができる用例に、資料としての偏りが

生じることはやむを得ない。

## 2

“在”を伴う語法は、それぞれやや異なる機能を担っているものの、形態の点で類似点を持つためか、ある時期には互いに影響を及ぼし合ったことが考えられる。現代では老舎の作品にその痕跡を見ることが可能である。

例えば、

①好像全世界的黑暗都在等着他似的。(《骆驼祥子》3)

②心中老在咒骂，头老低着，忘了还有日月，忘了老天。(同上)

民国初期の北方系作品では、一般に“在V”が用いられることは少なく、それに類似したものとして“正在V”及び“还在V”型を見出すことができる。これは“在V”が北方で受け入れられる際に、“还在V”型が“正在V”との間の過渡的形態としての役割を果たしたためと考えることができる<sup>5)</sup>。

清代以前の作品においても、南方・北方の別を問わず、“在V”が使われることは稀であり、太田1958は次の例の“还在V”を、“正在V”より生じた“在V”の一変形としての最も初期の例であると指摘する<sup>6)</sup>。

③若是还在应考，贤契留意看看。(《儒林外史》7)

しかし、“还在V”型の用例は、それ以前に全く存在しなかったということはない。

④原来一个黑汉，一个道人，一个白衣秀才都在高谈阔论。(《唐三藏西游传》8及び《西游记传》2)

⑤众人都在耍笑，内一个眼快的指道。(40回本《平妖传》3)

⑥武松便转身回过刀来，那张都监方才伸得脚动……，两个都在挣命。(《水浒传》31)<sup>7)</sup>

⑦那小厮跌倒在地，尚在挣命。(《水浒传》103)

⑧在前边庙里他有一担货物，被人抢了去，也在纳闷。(《水浒后传》2)<sup>8)</sup>

こうした用例の多くは、いずれも“正在V”を少なからず含んでいる作品で用いられている。この事実から、“正在V”と“还在V”型との間には、ここでも何らかの相互関係が生じていたことが考えられるが、“正在V”の使用頻度がとりわけ高い作品にのみ“还在V”型が現われるわけではない。したがって、旧白話において“正在V”と“还在V”との間に何らかの関係が存在したか否かは、これらからは判断し難い。

そこで“正在V”について見てみると、明の万曆後期以降の作品にしばしば

この句型が使用されるのを知ることができるが、宋元の姿を伝えるとされる作品にも、わずかながら“正在V”を見い出すことができる。

⑨ 闻赵王在长信宫带酒未醒，正在睡哩。（《前汉书评话》中）

⑩ 宋江一见了吴伟两个正在假偷，便一条忿气怒发冲冠。（《宣和遗事》前）<sup>9)</sup>  
同様に，“在”を伴う句型のうち、最も成立が遅れたとされている“在V”にしても、宋代の作品からさえ、その用例を検出することができる。

⑪ 昔有二人在耕田。（《笑海丛珠》3）<sup>10)</sup>

また、見かけ上、“在V”でありさえすればよいとするのであれば、さらにいくつかを指摘できるが、中でも次の例は、定形化して各所で使われるもののひとつである<sup>11)</sup>。

⑫ 鲁达在逃，行开个海捕急递的文书，各处追捉。（《水浒传》3）

以上のように，“正在V”，“还在V”，“在V”の句型は、古くから存在し、出現と消滅を繰り返す、ある時期に至って急速に安定した形を整えるに至ったと見ることができる。しかしながら、これらの用例はあまりに散発的であり、その分布や用法に一定の偏りや傾向を見い出すには十分でない。これら三句型の検討に、これまで用いられてきた資料を重視する限り、こうした句型がまとまった用例を示すのは、やはり相当に新しい時代に始まるということになる。ところが、明代中頃に成立したとされる白話長編小説に、“正在V”，“还在V”，“在V”がそろって大量に用いられるという事実が存在する。万曆丁酉（万曆25年=1597年）罗懋登の序を持つ《三宝太监西洋记通俗演义》がそれである<sup>12)</sup>。

### 3

孫1982によれば、《香山记传奇》序にも罗懋登の名が見え、《曲海总目提要》は罗懋登を陝西人であるとする。作品中には呉語に近い語彙が少なからず含まれることから、罗懋登が陝西人であるとする説に疑問を示す立場もあるが<sup>13)</sup>、成立年代についての異論は提出されていない。一方、時代をある程度反映するであろういくつかの特定の語彙・語法に注目すると、一般に古いとされるものから比較的新しいとされるものまで広く用いられており、また内容的には《西游记》と共通の話柄もあるので、作者が先行の作品の内容や形式を使いながら《三宝太监西洋记》をまとめたことを思わせる。

こうした点は、いずれもこの作品が明代中期の成立であるとする考えと、大きく矛盾しない。しかし、“在”を伴う語法については、《三宝太监西洋记》はその前後の時代に成立した作品とは甚だ異なった様相を呈している。“正在V”

が38例，“还在V”が38例，さらに“在V”が17例も存在するのである。これは，“正在V”の出現時期が，40回本《平妖传》や120回本《水浒传》より些か早いという点のみではなく，五・四期以前にはまとまった形で使われることがないと考えられていた“在V”までもが多数用いられているという点で大いに注目できる。そこで，以下に《三宝太监西洋记》における“在”を伴う句型の用法について，検討を加えてみたい。

#### 4

《三宝太监西洋记》の“正在V”を考えるにあたって，それと関連があると思われる“正V间(处, 际)”及び“正在V间(处, 际)”について見ておきたい。

⑬正走之间，撞着一位黄门官来了。(第11回，他に第36回にも類例あり)

⑭正行之际，猛听得后面喊杀连天。(第33回，他に，第6回，11回，39回，40回にも類例あり)

⑮正在绸缪之处，只听得蓝旗官跪在门外禀道。(第18回，他に第50回にも類例あり)

⑯正在踌躇之间，那晓得金毛道长一下宝贝打将来。(第55回)

これらの句型は，多くの場合，動作が行なわれる時間の一点を指定する従句として用いられるが，そこで使われる動詞の性質と相まって，進行の概念を表す機能をも持ち得る。しかしながら，こうした機能は，現代語におけるアスペクトを示すものと些か異なることは，“正在V间”の中に程度補語構造や否定詞が含まれることから知られる。

⑰正在追赶的紧溜处，非幻说道。(第7回)

⑱判官正在没走处，一直跑上了殿。(第91回)

“正V间”や“正在V间”が多用されるという事実は，《三宝太监西洋记》に特徴的なものではなく，《西游记》などの他作品にも認めることのできるものである。この点で《三宝太监西洋记》は明代中期の白話作品の一般的な姿を示していると言えるが，“正在V”については，同時期の作品とはいくぶん異なる。次に“正在V”を見てみたい。

#### 5

⑲两下里正在作笑，忽听得半空中划喇喇一个响声。(第4回)

⑳师徒们正在闲谈闲论，不觉得就是蛾眉山了。(第7回)

㉑長老正在升座玄谈，信风到了，長老便知其情。(第10回)

《三宝太监西洋记》では、“正在”と動詞が直接に結び付くこうした句型が常用されており、作品全体では、“正V間”と“正在V間”を合わせても43例にしか達しないのに対して、“正在V”は38例にも及ぶ。明代中期のいくつかの作品を基に判断する限りでは<sup>14)</sup>、“正在V”がこのように数多く用いられるという点において、《三宝太监西洋记》は特異であると言わねばならない。

この“正在V”は、“正V間”や“正在V間”と同様に、その多くが従句として機能している。しかし、主句用法もいくつか存在し、とりわけ次の例は、“正在V”が“撞着”の賓語の一部を構成しているという点で注目できる。

㉒ 曾经上古时候，有五百只番船过洋取宝，撞着他正在张口，五百只船只当得五百枚冷烧饼。(第96回)

ところが、例⑰や⑱と同様に、“正在V”に程度補語構造や否定詞が含まれる用法も依然として使われ、“正在”がなお“正在V間”と関連を保っていることを示している。

㉓ 正在激得爆跳，恰好关里面一声牛角喇叭响。闪出驸马将军哈里虎来。(第64回)

㉔ 国王正在不见了髻头，懊悔一个不了，只见把门的番卒报说道。(第61回)

《三宝太监西洋记》において、“在”を伴う語法として、以上に見たような例が多用されるだけならば、単に“正在V”をまとまった形で含む初期のものとして、この作品を位置付けることができるに止まる。しかし、この作品には、現代語の用法に酷似する“在V”すらも大量に見い出すことができるのである。

## 6

まず“还(あるいは都、只、又、也など)在V”の句型を見ることにする。

㉕ 忽一日三位老爷坐在厂里，正是午牌时分，众匠人都<sub>○</sub>在<sub>○</sub>过午，猛然间<sub>×××</sub>作房里<sub>×××</sub>啰啰吨吨，泛唇泛舌。(第17回)

㉖ 王明脱了樵夫，得了宝贝，取了凤凰蛋，愈加不胜之喜，心里<sub>○</sub>只在<sub>○</sub>想，说道。(第52回)

㉗ 东门上是个青毛道长，恰好青毛道长<sub>○</sub>又在<sub>○</sub>磕睡，王明看见青毛道长呼呼的磕睡，他就喜之不胜，心里说道。(第59回)

㉘ 原来西海蛟又有些灵性，也<sub>○</sub>在<sub>○</sub>隄防陈都督的暗箭暗枪，只看见是枝标，他急忙里取出水磨鞭来，一声响，把枝标早已打落在地上。(第62回)

こうした“还在V”型は、形態的には“正在V”の“正”が“还”などに置き換わったものと見ることもできる。しかし、㉕のように主句の“猛然间”な

どの副詞と呼応して従句を作る用例は多くない。例⑳～㉘は従句として用いられているのか、主句を構成しているのかは判断しがたいし、次の例でも“又在V”句とその後に位置する句との接続の密接さは相当に失われている。

㉑百夫人又在算计黄凤仙，晓得这个飞刀不奈他何，卖一个破绽，黄凤仙趁空儿砍将进去。(第81回)

さらに次の二例は、主句としての用法と見る他はない。

㉒红莲坐在蒲团上，哼也哼，还在哭。哭了一会，把只手揉起肚子来。(第92回)

㉓第子却才得了正果，因受他这一牵扯，故此羈迟不得职掌龙宫，还在闲散。(第94回)

“还在V”型は，“正在V间”との間に共通点を保ちつつも、それとの距離をしないで大きくしつつあるかに見える。

## 7

次に，“还在V”型に“还”や“都”などを伴わない例、すなわち，“在V”を見てみたい。

㉔二位元帅看来，只见是一个老白龙，口里不住的在吃人哩。(第19回)

㉕国师道：“是我贫僧在打坐，猛然间一阵信风所过，贫僧放了风头，抓住了风尾，嗅了一嗅，信风上当主一物。(第34回)

㉖一日，波斯国王在献宝，他就撮弄一个鬼怪，把块纸剪做两只飞鸦，一只飞鸦啣将他一个宝贝来。(第96回)

“在V”のすべての用例のうち、4例が例㉔の如く、句末に“哩”を伴い、明確に主句として用いられている。しかし一方では、例㉕・㉖のように、主句の“猛然间”や“就”と呼応して従句を構成しているものも見られる。この点では、“在V”は“正在V间”と同じ機能をも担っていると言える。

これらの用例の検討から、“在V”は、“还在V”と同様に、主句としての用法を示しながらも、なお“正在V”や“正在V间”との間に、些かの共通性を保っていることが知られる。

## 8

以上，“在”が動詞と結び付く句型を三つに分けてその用法を概観した。ここで知られたことは、これらの三句型は互いに共通性を保ちつつも、“正在V”には従句用法が目立つが、“在V”は現代語にも通じる主句用法を持ち、“还在V”型はそれら二型の中間的な機能を示すことがあるということであった。そ

こで“还在V”型及び“在V”が持つ機能について、現代語と比較しながら検討を加えてみたい。

㊸三太子<sub>○</sub>只在<sub>○</sub>算<sub>○</sub>计<sub>○</sub>射<sub>○</sub>别人<sub>○</sub>，却不<sub>○</sub>曾<sub>○</sub>算<sub>○</sub>计<sub>○</sub>别人<sub>○</sub>射<sub>○</sub>自己<sub>○</sub>。那里<sub>○</sub>晓得<sub>○</sub>这一<sub>○</sub>箭<sub>○</sub>，正中<sub>○</sub>着<sub>○</sub>其他的<sub>○</sub>左边<sub>○</sub>肩<sub>○</sub>头<sub>○</sub>。（三太子は他人を射つことばかりを考えていて、他人が自分を射つことは考えていなかった……）（第65回）

例㊸では“只在算计”が“不曾算计”と対立する表現として使われており、この作品における“(还)在V”型の機能を解釈する手がかりを、ここから得ることができる。

㊹过<sub>○</sub>了一会<sub>○</sub>，只<sub>○</sub>听见<sub>○</sub>嗡<sub>○</sub>一声<sub>○</sub>响<sub>○</sub>，一个<sub>○</sub>苍蝇<sub>○</sub>飞<sub>○</sub>到<sub>○</sub>面<sub>○</sub>上<sub>○</sub>，打<sub>○</sub>一<sub>○</sub>撞<sub>○</sub>。王<sub>○</sub>明<sub>○</sub>只<sub>○</sub>在<sub>○</sub>想<sub>○</sub>着<sub>○</sub>瞌<sub>○</sub>睡<sub>○</sub>虫<sub>○</sub>儿<sub>○</sub>，认<sub>○</sub>不<sub>○</sub>得<sub>○</sub>是<sub>○</sub>个<sub>○</sub>苍<sub>○</sub>蝇<sub>○</sub>，问<sub>○</sub>说<sub>○</sub>道<sub>○</sub>。（しばらくするとブーンという音がして、一匹のハエが飛んで来て顔に当たった。王明は眠り虫のことばかり考えていたので、それがハエだということがわからずに……）（第83回）

この例では“只在V”が“着”と結び付いており、見かけの上では、現代語における“在V着”と完全に重なる。“在V着”の句型は、一般には、南方系の“在V”と北方系の“V着”が混合した結果、現代に至ってようやく成立したものとされるが、《三宝太监西洋记》に注目すれば、明代に已にこの句型が出現していたと言える。

また、“一边～，一边～”の中で“在V”を用いることによって、二つの行為の同時進行を示していると思われる例もある。

㊺不<sub>○</sub>知<sub>○</sub>怎<sub>○</sub>么<sub>○</sub>样<sub>○</sub>儿<sub>○</sub>，那<sub>○</sub>小<sub>○</sub>娘<sub>○</sub>子<sub>○</sub>的<sub>○</sub>下<sub>○</sub>身<sub>○</sub>小<sub>○</sub>衣<sub>○</sub>服<sub>○</sub>都<sub>○</sub>是<sub>○</sub>散<sub>○</sub>的<sub>○</sub>。那<sub>○</sub>小<sub>○</sub>娘<sub>○</sub>子<sub>○</sub>肚<sub>○</sub>皮<sub>○</sub>儿<sub>○</sub>一<sub>○</sub>边<sub>○</sub>在<sub>○</sub>搥<sub>○</sub>，一<sub>○</sub>双<sub>○</sub>小<sub>○</sub>脚<sub>○</sub>一<sub>○</sub>边<sub>○</sub>在<sub>○</sub>捣<sub>○</sub>，左<sub>○</sub>捣<sub>○</sub>右<sub>○</sub>捣<sub>○</sub>，把<sub>○</sub>和<sub>○</sub>尚<sub>○</sub>的<sub>○</sub>小<sub>○</sub>衣<sub>○</sub>服<sub>○</sub>也<sub>○</sub>捣<sub>○</sub>吊<sub>○</sub>了<sub>○</sub>。（どうしたわけか、その女性の下着はすっかりほどけた。彼女はお腹を押し付けながら、足もバタバタ動かしていると、和尚の下着も脱げてしまった）（第92回）

現代語では“一边～，一边～”句の中で、“在V”が用いられることは、一部の方言において認められるものの、必ずしも標準的な用法でないと言われる。この点で、《三宝太监西洋记》の“在V”は現代語と些か異なる。

さらに、“要”が“也在V”のVとして用いられる例も存在する。

㊻那<sub>○</sub>个<sub>○</sub>百<sub>○</sub>马<sub>○</sub>之<sub>○</sub>王<sub>○</sub>自<sub>○</sub>由<sub>○</sub>自<sub>○</sub>在<sub>○</sub>，也<sub>○</sub>在<sub>○</sub>转<sub>○</sub>身<sub>○</sub>，也<sub>○</sub>在<sub>○</sub>要<sub>○</sub>去<sub>○</sub>。（百鳥の王は自由に身をひるがえしたり、飛び去ろうとしたりした）（第76回、他に第83回にも類例あり）

この例では“也在转身”と“也在要去”が対を構成しているが、ここに現代語と同じ進行の機能に通じる要素があるか否かは確認し難い。

このように、《三宝太监西洋记》における“在V”は、現代語に極めて近い



用法を示しつつも、現代語の所謂進行の概念と一致しないものも含んでいる。

9

ところで、“在V”を論じる時、しばしば“在那里V”との関係が取り上げられる。《三宝太监西洋记》でも、この句型が用いられる。

㊸一撇撇在半天云里，只见云里面有一群白鹤在那里飞舞（第71回）

この例のように、“云里面”などの語で場所が明示されているにもかかわらず、さらに“在那里”が用いられる例が、旧白話には少なからず認められる。こうした“在那里V”は実義性を失う結果、進行の概念を示す機能を持つとされる<sup>15)</sup>。“在那里”が実義性を失っているか否かは、多くの場合、文脈に頼って判断せざるを得ず、用例数を算出し難いが、作品全体で約30例をその例として指摘することができる。そこで“在V”と“在那里V”とを比較してみたい。

㊹崔判官已自到了厅上，问道：“侧厅儿是那个在讲话哩？”（第87回）

㊺好个刘氏，行止疾徐，曲中乎礼，行到厅上，说道：“侧厅儿是我在那里讲话。（第87回）

例㊸では“在V”によって進行が示されているが、この句に対する返答として、例㊹では“在那里V”が用いられている。このことから、この作品においても、“在V”と“在那里V”は近い関係にあり、両者は類似した機能を持つものとして、併用されていると見ることができる。

10

以上、所謂進行の概念を表すと考えられる“在”を伴う句型について、それをいくつかに分類して考察を加えた。その結果、《三宝太监西洋记》における“正在V”、“还在V”型、“在V”及び“在那里V”は、機能・用法の面で互いに類似した特徴を備えていることが知られた。しかし、これらの句型が、明代中期以前にどのように関連し、影響力を持ち合ったのかという点は、なお明らかではない。また、《三宝太监西洋记》において、“还在V”型や“在V”がこれほど多用されたにもかかわらず、なぜ当時の他作品に広く受け入れられることなく、語法史の流れの底に沈んでしまったのかという問題も、検討を待たねばならない。

しかし、小論で扱った“(还)在V”が、非直接的な形であれ、現代語の“(还)在V”に継がるものであると仮定すれば、《三宝太监西洋记》の成書年代（もしくはテキストの信憑性）に疑問が提出されない限り、少なくとも次の二点は

指摘することができよう。すなわち、動詞が“在”を伴って進行もしくはそれに近い概念を表す語法は、明代中期以前に、文学言語の表面には現れ難い姿で存在していたであろうこと。そして、“还在V”型や“在V”の句型の発生は、これまでの所説と大いに異なり、清代や民国初期ではなく、明代中期にまで遡ることができること。

已に示したように、《三宝太监西洋记》においても、形態・機能の点で、“还在V”型が、“正在V”と“在V”との中間に位置するかに見える。もし、“还在V”型が、“正在V”から“在V”が成立する際の一形態としての役割を担ったのであれば、民国初期に北方で“在V”が受け入れられる過程と同様の現象が、明代中期に生じていたことになる。300年の時の流れを隔てて、歴史は二度繰り返されたのであろうか。

〈注〉

- 1) 例えば王力1946、香坂1974など。
- 2) 蕭斧1957、拙論1982。
- 3) 拙論1990。
- 4) 太田1958, p. 276。
- 5) 前掲拙論1982。
- 6) 注4に同じ。
- 7) この用例は、香坂1987, p. 286で已に指摘されている。内閣文庫蔵郁都堂本に拠った。
- 8) この部分については、陳本と蔡本との間に異同はない。
- 9) 例⑨及び⑩の二用例は、香坂1983, p. 7 で已に指摘されている。
- 10) 《笑海丛珠》は南宋・元の頃の作品とされるが、現存するテキストは江戸時代の写本である。内閣文庫本に拠った。
- 11) 《水浒传》のみに限って見ても、第2回、3回、4回、12回、22回…など少なくない。
- 12) 小論では、筑波大学蔵十二行本を用い、内閣文庫蔵十二行本で補った。
- 13) 陆树岩・竺少华1985。
- 14) 調査対象にした数作品に基づく限り、“正在V”が目立ち始めるのは、万曆末以降である。前掲拙論1990。
- 15) 前掲蕭斧1957他。

参考文献

- 太田辰夫 1958 《中国語歴史文法》江南書院  
王 力 1946 《中国語法理論》商務印書館  
香坂順一 1974 《中国語学の基礎知識》光生館  
同 1983 《白話語彙の研究》光生館  
同 1987 《〈水滸〉語彙の研究》光生館

- 蕭 斧 1957 <“在那里”，“正在”，和“在”>《语法论集》2
- 孙 楷 第 1982 《中国通俗小说书目》人民文学出版社
- 陆树苍·竺少华1985 <三宝太监西洋记通俗演义前言>《三宝太监西洋记通俗演义》上海古籍出版社
- 伊原大策 1982 <進行を表す「在」について>《中国語学》229
- 同 1990 <「正在V」句型から見た<西遊記>諸本>《言語文化論集》31  
(筑波大学)